

マーヴェルの詩の諸段階

——「謙遜」に達するまでの道——

山 本 俊 樹

もし一言で述べることができるとすれば、マーヴェルは幸せな人であったと言えよう。もちろんこの言葉は誤解を招くおそれがないわけではない。マーヴェルが生れ育ち、大人として活動した時代は激しい戦いと反目の時代であったし、マーヴェル自身もいろいろと心の葛藤を経験した。マーヴェルは田園にかこまれて少年時代を過すことができたが、家族に不幸が及ばなかったのではない。ケンブリッジで今も最もピューリタンの伝統が強いということでは知られているエマヌエル・コレッジで学んだその父は、ヨークシャーのハルで英国国教会の聖職者となり、またグラマー・スクールの校長も兼ねて人望があったが、マーヴェルが十九才の時に溺死している。清教徒革命が、勃発した時マーヴェルはまだ二十才台に入っただばかりであった。ケンブリッジの学生だった頃に一時期カトリック教会に心が向き、大学をやめようとしたこともあったが、父が心配してマーヴェルを探し出し、大学に連れもどしたこともあった。マーヴェルは多感な青年だったようであ

る。その心の中にしばしば不信、疑惑、憤り、苦悩の思いが満ちたことが想像できるし、事実マーヴェルの五十七年の生涯は波瀾万丈のそれだったと言っても過言ではない。

マーヴェルを偉大な詩人と呼ぶことはできないかもしれないが、マーヴェルは数篇の偉大な詩を書きこすことができた、とアールヴァレイスは述べている^①、また本物の詩人だったとも言われる^②。このことだけでもマーヴェルを幸せだったということができよう。そのいくつかの優れた詩を考察しながら詩人の心の成長のあとを辿り、一つの試みとしてその経果を纏めてみたいと思う。

二

マーヴェルはピューリタンの詩人であったとよく言われてきた^③。事実その詩にはピューリタンの特質がよくあらわれているものも多い。この点ではカルヴィンの教義から強い影響を受けていた父から伝えられたものが大きかったと思われる。しかしマーヴェルは決して偏狭ではなかった。学生時代ケンブリッジではリチャード・クラショールと親しかったと言われるし、かなりの期間王党派に近い心情を持ち続けていた。王党派のすぐれた詩人の一人であったリチャード・ラヴレイスとも親しかったし、ラヴレイスに対して真情溢れる詩を贈ったこともあった。この詩には友への熱い思いとともに、マーヴェル自身の苦悩の一端もあらわれている、われわれにさまざまのことを考えさせる^④。

C・ヒルはその著名な書物の中のマーヴェルに関する章の中で、マーヴェルの中にヒューマーがあったことを指摘している^⑤。このことはマーヴェルに醒めた心の目があり、直面する事象の中にあまりに直接的に没入することなく少し離れた所から対象を眺めるという長所があったことをわれわれに思いおこさせる。これはまた場合によっては自らの愚かしさをも快く認める心のゆとりともつながってくるものである。マーヴェルにこの心の余裕やヒューマーがあったことは、マー

ヴェルが歴史の動向を正しく認識できたことと深い関係があるように思われるが、これはまた稿を改めて論じてみたいと思う。

マーヴェルはピューリタンだったが、清教徒革命の中で軍人として実際に戦いに従事することはなかった。このこともマーヴェルにとって幸いだったと言えるが、一六四二年から四年間を海外で過ごし、家庭教師等の仕事に従事しながら各地を転々としたと思われる。この間にマーヴェルは多くの外国語を習得し、それに熟達した。この外国語の知識が後に共和国政府のもとでラテン語秘書助手になった時に、大いに活用されることになった。

マーヴェルはジョン・ダンの流れの中にある形而上詩人のほとんど最後の人としてもよく知られているが、「奇想」(conceits)に富み、ダンの影響下にあることがいちじるしく明瞭であるものに、「内気な恋人に」(To His Coy Mistress)と「愛の定義」(The Definition of Love)がある。両者ともに愛する者への切なる恋の思いがうたわれていて有名であるが、特に前者の中にマーヴェルの遊びや戯れの心を見ることができ。すなわち、「女のかた、私たちに十分な時間と場所があるならば、あなたがいくら内気で、ためらっておられてもそれはよくないことは申せないでしょう。」(Had we but world enough, and time, / This coyness, Lady, were no crime. — 11. 1, 2)と恋人に呼びかけたあと詩人は想像を逞しくして、ほとんど無限といえる空間と時間を想定した上で、二人の恋が成長し実るのをゆっくり待つこともできそうに議論を展開してゆくのだが、突如調子をかえて、時間にも追いたてられるし、死が訪れてからではもう遅いと言って、「私たちの力や優しさを丸めて一つの球にしましょう、烈しく戦って人生の鉄の格子を打ちやぶって快楽を奪いとりましょう。そうすれば太陽を停止させることはできなくても、それを疾走させてやれるでしょう。」(Let us roll all our strength, and all / Our sweetness, up into one ball: / And tear our pleasures with rough strife, / Thorough the iron grates of life, / Thus, though we cannot make our sun / Stand still, yet we

will make him run. — II. 41—46)と述べ、恋の楽しみを今すぐ獲得しましょうと、恋人に迫るのである。恋愛が主題になっていて、われわれはマーヴェルの奇想に度胆を抜かれつつマーヴェルの遊びの心を知ることができるが、「人生の鉄の格子」という言葉からも理解できるように、人生の時に限りがあること、人が死すべきものであることが同時に厳粛に把握されている。

「愛の定義」にもマーヴェルの遊戯の心を見ることができ、この中では、決して相交わることがなく、そのため成就することがない男女の恋がうたわれていて、ここでも、「運命は鉄のくさびを打ちこんで、いつでも二人の間に割って入ろうとする」(But Fate does iron wedges drive, / And always crowds itself betwixt. — II. 11, 12)し、「運命の鋼鉄の定めが、二人だけで抱き合うことがないようにと、南北極のようにわれわれを遠く隔っている」(And there — fore her decrees of steel / Us as the distant poles have placed, /... Not by themselves to be embraced, /... — II. 17, 18, 20)のである。中世の詩にも多く見られるが、人の歩みが、特に若い恋人たちの愛が時間や死や宿命によって制限を受け、しばしばその自由が奪われるのである。前述のようにマーヴェルの詩の中にヒューマーや遊びの心があることは容易に認めうるが、マーヴェルがその中でも人生の厳粛な事実をありのままに指摘していることは注目すべきことである。

三

マーヴェルには「草苴る人」の詩が四篇あるが、ヒルはこの草苴り人やその手に握られる大鎌の中に、前述の「運命」が暗示されていることを指摘している⁽⁷⁾。その中の三篇にはジュリアーナ(Juliana)が登場するが、ジュリアーナはこの三篇の詩においては、後に「花冠」(The Coronet)にも出る蛇のような存在のように見え、草苴り人を悩ませ、迷わせ、

その仕事を台なしにする。また草刈り人は不注意になって鎌で自分の足を切ってしまう。その時「草刈り人デーモン」(Damon the Mower)は、恋人に蔑まれて死ぬ人に比べるところこの傷は軽い。それは薬で血を止めたり、傷を蔽うこともできるから、と言いつつ「ただジュリアーナの目で傷ついた人には治療薬は見つからない。なおせるとすればそれは死だけだ。死よ、おまえも草刈り人だからな。」(‘Only for him no cure is found, / whom Juliana’s eyes do wound, / ‘Tis death alone this must do: / For Death thou art a Mower too.’ — II. 85 — 88)と言いつつこの詩をこめくへつらる。

「草刈り人のうた」(The Mower’s Song)では草刈り人は最初から嘆いている。「かつて私の心は、みずみずしくて華やかなこの辺一帯の牧草地をそのまま反映していたし、草の緑を見ると鏡にうつし出すように希望が見えていたが、ジュリアーナが来たら、私が草にするのと同じことを私の思いや私自身にするのだ。」(My mind was once the true survey / of all these meadows fresh and gay, / And in the greenness of the grass / Did see its hopes as in a glass; / When Juliana came, and she / What I do to the grass, does to my thoughts and me. — II. 1 — 6)と言いつつ。すなわち草刈り人が草をなぎ倒すように、ジュリアーナが私と私の思いをめちゃめちゃにしまったと嘆いているのである。このように考えると、ジュリアーナもまた草刈り人のように運命や死に相応する性質を持っている存在であることがわかる。この「草刈り人のうた」の基調語は「倒れる」(fall)であるとティラーはとり、深い内容理解を示す言葉を示しているが、⁽⁸⁾この言葉はこの詩の中では次の箇所に出る。「花も草も私も一切合財がひとしく破滅して倒れるだろう。」(And flow’rs, and grass, and I and all, / Will in one common ruin fall. — II. 21, 22)この詩が聖書の思想や信仰を特別にあらわな形で表白しているとは言えないであろうが、かつては自然に親しみ、自然を自分の心としていた草刈り人がジュリアーナの出現をとおして変ってしまい、もはや自然を友とすることができなくなつて、すべての破滅を予見するものとなつたことは、ティラーが言うように人の墮罪の結果であると言える。かつて草刈

り人は、蛍の光に照らされて家路につくことを喜んだが「ジュリアーナが来てからは、蛍よ、おまえの親切なあかりも浪費になったよ、なぜって彼女に心がかき乱されてしまって二度と家にもどる道がわかりそうにないから。」(your courteous lights in vain you waste, / Since Juliana here is come, / For she my mind hath so displaced / That I shall never find my home. — II. 13—16, “The Mower to the Glowworms”)と悲嘆にくれるのである。ここにもわれわれはエデンの園から出た人間の原初の嘆きがこだましているように感ずるのである。

一方「庭を咎める人」(The Mower against Gardens)では草薙り人は、人の手によって造り上げられた庭園が、本来自然が持っていた野趣をことごとく奪い、これを飾り立てて入念な細工を施したために、とりかえしがつかないほど醜悪になっていることを指摘して嘆き、非難する。これはたとえば環境汚染問題等で苦しむ今の時代のわれわれの問題とも深く結びつくものを持っているが、ここに表わされているものは罪におちた人の心であると言える。この許されるべき範囲をこえて自然を損傷して自らの利益のために用いようとする罪に沈んだ人間を、マーヴェルは草薙り人の言葉を借りて「高慢なもの」と呼んでいる。

Luxurious man, to bring his vice in use,

Did after him the world seduce,

And from the fields the flowers and plants allure,

Where nature was most plain and pure. — II. 1—4

.....

And yet these rarities might be allowed

To man, that sovereign thing and proud,

Had he not dealt between the bark and tree,

Forbidden mixtures there to see. — II. 19—22

(快樂を追求する人間は、悪徳を習慣として打ちたてようと自分の思うとおりには世界を誘惑し、もっとも素朴で純粹な自然が保たれている野から花々や植物をおびきよせる。……けれども万物の君主、高慢なもの、人間にはこのような珍種の収集も許されるのかもしれないが、それも幹と樹皮の間に細工して禁じられている雑種を見たいなどとしなければの話だ。)

王政回復後のマーヴェルは田園詩を書くことを止め、諷刺詩を書き出すが、この詩にも見られるマーヴェルの鋭い筆鋒は後の諷刺詩の前駆をなすと言うことが可能であろう。

四

マーヴェルの詩の中でジョージ・ハーバートの詩の性質を持つものとして言及されるものに「目と涙」(Eyes and Tears)や「花冠」がある。「花冠」はハーバートの「首輪」(The Collar)や「花輪」(A Wreath)とも相応なるものを持っている。この詩はどちらかというところ短いものである。

When for the thorns with which I long, too long,

With many a piercing wound,

My Saviour's head have crowned,

I seek with garlands to redress that wrong:

Through every garden, every mead,

I gather flowers (my fruits are only flowers),

Dismantling all the fragrant towers
That once adorned my shepherdess's head,
And now when I have summed up all my store,
Thinking (so I myself deceive)
So rich a chaplet thence to weave
As never yet the King of Glory wore :
Alas, I find the serpent old
That, twining in his speckled breast,
About the flowers disguised does fold,
With wreaths of fame and interest.
Ah, foolish man, that wouldst debase with them,
And mortal glory, Heaven's diadem !
But Thou who only couldst the serpent tame,
Either his slippery knots at once untie ;
And disentangle all his winding snare ;
Or shatter too with him my curious frame,
And let these wither, so that he may die,
Though set with skill and chosen out with care :

That they, while Thou on both their spoils dost tread,

May crown thy feet, that could not crown thy head.

(あまりにも長い間、数々の刺し傷を加えて救い主に茨の冠をかぶせていた代償に、私は花輪でその罪をつぐなおうとした。△私の果実はただ花だから▽どの庭、どの牧場からも私は花を集める。女羊飼の頭を飾っていたかぐわしい飾りつけもすべて外した。さて私の集めてみたものすべてを纏めあげて、栄光の王さえこんなに立派な花冠をついぞ織りなしてもらったことがないと考えるその時、△私はそんなにまでも自らを欺く▽私は昔ながらの蛇がいるとわかる。まだらの胴をからませて花の間に変装して身を丸めている。花輪のように見える名声と利得心もある。ああ愚かな私よ、こんなもので、また滅びゆく人の誇りで天の宝冠を汚そうとしていた。蛇をならすことがおできになる唯一の方、主よ、蛇のぬるぬるした結び目をすぐにほどき、取り巻いている罫を壊して下さるか、それでなければ、私の入念に作り上げた作品を蛇とともに打ち砕いて下さい。たとえその出来がよく、行き届いた配慮で選びぬかれていても。それはあなたがその獲物を踏みつけておられる間に、頭におのせはできない冠ですが、せめておみ足に置かせて頂きたいからです。)

前述のようにこの詩と比較されるハーバートの「首輪」は有名な詩であるが、「首輪」では詩人は最初自由を求めて、烈しく叩きつけるように、素朴な反抗心をむき出しにして語る。しかし最後に主キリストが「子よ」と呼びかけている声が聞えたように思い、詩人は「私の主よ」と答えてもとの安息の中に戻ってゆくというものである。この詩はハーバートの心の方向転換を見事にうたい上げている詩である。「花輪」の方は静かな調子のものであるが、花輪が少しずつ編まれてゆくように、一行々々が静かなゆっくりとした進展のあとを見せながら連っており、技巧の点から見てもマーヴェルの「花冠」と似ている。これは祈りの詩であって、「あなたは私のすべての道をご存知です。私がそれによって生きている

歪んだ曲りくねった道をご存知です。」と言って自らの罪を告白し、また「私が生きることができませんように無雑な心をよせて下さい。」と祈ってその謙遜な心を表白している。マーヴェルの「花冠」は女羊飼という言葉があることからわかるように、詩人はそれに対する羊飼という想定であって田園詩の趣きを備えているが、しかしその内容は深く宗教的である。最初の四行で、救い主を粗略にあつかい傷つけてきた自らの罪を告白し、せめてその償いに最良の花冠を贈りたいと思ひ懸命につとめる。かつては恋のうたで女羊飼を喜ばせていたが、もうそれを止め、詩人は今度は救い主のためにいわば華やいだうたを作り、それを捧げようとする。しかし詩人は自分の集めた花の蔭に名声と利得心を担ったおぞましい蛇がいるのに気づくのである。

ここで詩人はもう祈らずにいらなくなる。救い主だけが蛇に勝利をおさめてその悪だくみを毀ちうることを認め、蛇とともに私が入念に作り上げた作品をも打ち壊して下さいと願うのである。私が自信と誇りにみちて行ってきた仕事を救い主が蛇とともにふみつけて下さる時に、キリストの頭に載せられるような花冠では全くないが、その足もとにならばそっと差し出せるかもしれないつましい花冠を作らせて頂きたい、というのが詩人の心からの願いになる。

この詩は芸術と信仰の関係についても深い示唆を与えるものであり、またマーヴェルの回心の詩といふことができるものである。⁽⁹⁾ 救い主の力によってはじめて自恃の心が打ち砕かれ、自分が不遜であったことを悔い、再出発をする時にはじめて救い主を讃美する真の詩人になることができるのだ、ということをもマーヴェルは心深く知らされたように思われる。

「ひとしずくの露に寄せて」(On a Drop of Dew)も人のたましいとひとしずくの露とを結びつけている独自の味わいのある形而上詩の一つであり、ペイクニーは特にこの詩の中の最後の四行を重要視して、「露に等しいたましいが、天より下ったマナと相似るたましいになった時に始めて天国にのぼり行くことができる。」と述べ、この詩がたましいの新生を主要テーマとしてとり上げていることを叙述している。⁽¹¹⁾ ただマナは、この詩の中では、最後になって始めて導入されてく

るのでやや唐突な感じがのこるし、この詩全体のしめくりとしては少し異和感が残るかもしれない。むしろ露にひとしいたましいが、そのあるがままの姿で天国思慕の思いを切々と語り告げている情景が一そう強くわれわれの心に迫ってくると言えよう。

So the soul, that drop, that ray

Of the clear fountain of eternal day,

Could it within the human flow'r be seen,

Remembering still its former height,

Shuns the sweet leaves and blossoms green,

And recollecting its own light,

Does, in its pure and circling thoughts, express

The greater heaven in an heaven less. — 11. 19 — 26

(そのように人という花の中に認めることができるといえる、永遠の真昼のきよい泉から落ちたしずくであり、光線であるたましいも、昔高い所にいたことをいつも懐しみ、甘美な葉やみどりの花々を遠ざけ、かつて自分のものであった光を思い起しては、清いつぶらな思いの中で自分の小さい天国をとおしてより大きな天国を言い表わしている。)

五

マーヴェルの詩で最も有名であり、また重要なものの一つは「庭園」(The Garden)であろう。人びとはさまざま競技をして木の葉の冠を得ようとするが、あらゆる花や木々全体が、見事な人の心を休める花輪になっている庭の木蔭の方

がどんなにすばらしいことであろうか、と言って詩人は詩を書き始める。ドーノーはこの詩が「孤独の詩」(the poetry of solitude)の一つの例であると述べているが、⁽¹²⁾詩人は人びとの群がる雑沓を逃れて独り庭園に休らい静けさと無垢とを見出す。またエデンの園を思わせる豊かな自然はたわわにみのる果実を詩人に提供し、詩人は満ち足りる。ベネットは、第六連、第七連がこの詩のクライマックスであってそれ以前の連のしめくくりになっているというが、⁽¹³⁾それは次のようである。

Meanwhile the mind, from pleasures less,
Withdraws into its happiness :

The mind, that ocean where each kind

Does straight its own resemblance find,

Yet it creates, transcending these,

Far other worlds, and other seas,

Annihilating all that's made

To a green thought in a green shade.

Here at the fountain's sliding foot,

Or at some fruit- tree's mossy root,

Casting the body's vest aside,

My soul into the boughs does glide :

There like a bird it sits, and sings,

Then whets, and combs its silver wings;

And, till prepared for longer flight,

Waves in its plumes the various light. — II. 41—56

(その間に心は、つまらない楽しみごとから遠ざかり、真の幸せの中に場所を見つける。心は、ありとあらゆる存在がすぐに自分の似姿をそこに見出せる大海原といえるが、それ以上にずっと違っていたいくつもの世界や海を創造する。また創られたものの一切を緑の木蔭の緑の思想に創りかえ、還元する。)

この泉の滑りやすいへりとか、ある果樹の苔むした根の所に、からだという衣をわきに投げ捨てて私のたましいは大枝の間へと滑ってゆく。そこで鳥のようにたましいはすわり、歌い、その銀の翼をととのえ、それに櫛を入れる。そして長い旅の用意ができるまで羽を振って各種の色を輝やかす。)

第六連はマーヴェルが緑の色が好きだったことを改めてわれわれに思い起させる。ここでは緑には、若さ、みずみずしさ、力、優しさ、きよらかさ等の意味が含まれていると思われる。第七連はやや神秘的な表現であって常識では理解しにくい(14)が、ベネットも言うように、庭が静かであり平和であるので、たましいはここで最もよく天国に旅立つ用意ができるのである。⁽¹⁴⁾もちろん詩人はこの世を知り、自らをも含めて人の墮罪の現実を知っているから庭そのものを天国また永遠の避難所と考えることはできない。しかし少くとも詩人はこの庭に一つの真の安息と喜びとを見出し、ここで天国に旅立つ最もよい用意ができると知ったのである。おそらくこの庭は、マーヴェルが一六五〇年末より家庭教師として住みこんだフェアファクスの所有するヨークシャーのアプトン・ハウスの庭であろう。しかしこの詩に関するかぎり、この庭は象徴的意味が大変深い。前の草薙り人の詩では、人の罪によって自然は喪失されていたが、この庭はかつての楽園、エデン

の園を思い起させるとともに、また回復された楽園をも暗示深くわれわれの前に見せているように思われる。イギリス人は自然を大切にすると国民であると言われるが、やはりこの詩の思想の背後にあるものは恩恵としての自然であり、庭園であると思われる。最後の連に出てくる蜂は、この世の人間同様労働する生きものであるが、庭で働ける喜びと幸せをその姿の中に垣間見ることとも可能ではあるまいか。

How well the skilful gardener drew
Of flowers and herbs this dial new,
Where from above the milder sun
Does through a fragrant zodiac run ;
And, as it works, the industrious bee
Computes its time as well as we.
How could such sweet and wholesome hours
Be reckoned but with herbs flowers ! — II. 65 — 72

(巧みな庭師が何と見事に花や草から、この新鮮な日時計を作ったことだろう。天上からの太陽の光がここでは一層穏やかに、かぐわしい十二宮図の文字盤をとおってゆく。時間が刻まれるにつれてよく働く密蜂が私たちと同じように時を数える。草や花がなかったらどうしてこんなに甘美で健やかな時間を計ることができることだろう。)

「花冠」を回心の詩と呼ぶことができるとすると、「庭園」と「バーミュータ島」(Bermudas)を救済の詩と呼ぶことができるであろう。とくに罪に堕ちた人の姿を如実にあらわしている数篇の草苴り人の詩と比べてみるとその感が深い。

このバーミューダ島の別天地も歴史の現実と深くかかわっているが、この詩は時に詩篇的抒情詩と呼ばれることもある。この詩は今までに述べてきた多くの詩よりも少し後のものである。すなわち、一六五〇年の暮近くからは二年間マーヴェルはアプルトン・ハウスで過したが、一六五二年の終りごろにミルトンをとおしてクロムウエルの共和国政府に就職しようとして運動する。この時はこの就職は失敗したが、五三年七月以降ピューリタンの聖職者であり、当時イートン・コレッジのフェローだったジョン・オクスンブリッジの下で養われていて、後にクロムウエルの被保護者になったウィリアム・ダトンの家庭教師をすることになった。マーヴェル自身はバーミューダ島に行った経験はなかったが、オクスンブリッジが二回この島を訪問し、しかもかなりの期間滞在したこともあって、このオクスンブリッジをとおしてこの島の様子を聞き、その話がもとになってこの詩が生れたのである。

一六五〇年六月か七月に書かれたと思われる「アイルランドよりのクロムウエル帰還によせるホラティウス風オード」(An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland)と「アプルトン・ハウスによせて」(Upon Appleton House)には清教徒革命をとおして与えられた傷痕やその悲しみがあらわれているが、「バーミューダ島」にはオクスンブリッジを一六三四年に迫害したカンタベリー大司教ウィリアム・ロードに対する批判が僅かにほめかされているだけである。しかもこの島が、「嵐からも高位聖職者の怒りからも安全」(Safe from the storms, and prelate's rage—1. 12)であることが強調されるために述べられているにすぎない。

この詩はこの島にやってきたイギリスの水夫たちが舟を漕ぎながらうたう唄で、風がそれを聞きつけたという想定になっているが、水夫たちはその唄を次のようにうたいます。

What should we do but sing his praise

That led us through the watery maze,

Unto an isle so long unknown,

And yet far kinder than our own? — 11. 5—8

(大海原の道路を越えさせて下さり、こんなに長い間未知のままだったのに、母国「イギリス」よりも遥かに優しいこの島に導いて下さった方をどうして讃美せずにいられようか。)

読者は水夫たちが別世界に導き入れられたこと、そしてそのことが神のみ業として讃美されていることを最初から知ることができる。詩人はまたこの島全体が神の創造による場所として美しく創られていることを心をこめて描き出す。

He gave us this eternal spring,

Which here enamels everything,

And sends the fowl to us in care,

On daily visits through the air. — 11. 13—16

(神はとて春をここにお与えになったのですべてのものが色鮮かだ。私たちのことを思いやって下さって鳥をも遣わして下さるので、それが日毎に飛んでくる。)

「庭園」の場合のようにここにも各種の果物が実をつけ、よいものに欠けることがない。これはわれわれに『ヨハネの黙示録』二十二章にある新しいエルサレムの生命の水の川のほとりで豊かに実をつける果樹を思い起させる⁽¹⁵⁾。次の二行ではこの島の杉が神に選ばれて、レバノンより齎されたことが示されていて、このことも旧約聖書のソロモン王の故事を想起させる。

一そう重要なことは、この島に値い高い真珠にたとえられる福音が与えられていること、またここに神を礼拝する教会が建てられたことである。ここから讃美の声があがって天に届き、世界の諸所に福音が広まってゆくことが水夫たちの願

いであると思われぬ。

He cast (of which we rather boast)

The gospel's pearl upon our coast,

And in these rocks for us did frame

A temple, where to sound his name.

Oh let our voice his praise exalt,

Till it arrive at heaven's vault:

Which thence (perhaps) rebounding, may

Echo beyond the Mexique Bay. — 11. 29 — 36

(私たちは誇らしく思うのだが、神は私たちの浜辺に福音の真珠を投げ与えて下さった。またこの岩間に、私たちが御名を讃めまつるべく教会を与えて下さった。ああ、声をあげて、王の高みにも届くように高く御名を讃めまつろう。その讃歌がおそらくそこからだましてメキシコ湾の彼方にまでも届くかもしれない。)

「庭園」の場合にもその描写からかつてのエデンの園を思い起し、また回復されるパラダイスを望みみる事が可能だったが、庭にはやはり人の手が加わっているものであり「庭園」の最終連の「庭師」は創造者である神とれないことはないが、人間の庭師とする方が一そう自然なとり方であると思われる。これに対して「バーミューダ島」はまさに創られたままの自然であって、しかも創造者の慈愛の心が豊かに示されていて印象深い。さらにこの島に真珠の輝きと貴さを持つ福音が根づき、教会が建てられたということは、美しい原初の自然が福音の光によってきよめられて小さいながら天国の趣きを備えた場所となり、ここから救いが全地に及ぶ可能性が生れたということである。マーヴェルの詩にはしばしば複

雑な多くの要素が内包されており、これは研究者に多くの論議の材料を提供している。この「バーミューダ島」についても、ヒルを始め多くの研究者たちの批評があるが、全体が一つの讃歌になっていることは疑う余地はないと言えよう。

草薙り人がうたったことになっている四篇の詩を再び思い起すならば、ここまでくるまでにマーヴェル自身の心の中に大きな変化ないし成長があったことが想像できる。マーヴェル自身が心の庭の限界をこえて広い天地に入ってゆくことができたと言ってもよいかもしれない。しかもバーミューダ島の根底を支える働きをしているものが真珠の福音である。マーヴェルはこの島が祖国イギリスよりも「慈愛に富むより親切だ。」(8行)という。レグウィーの指摘を待つまでもなくマーヴェルは愛国者である。「バーミューダ島」はマーヴェル自身にとっては救いの天地であり、ここには安息と喜びが満ちているが、現実の歴史の中ではこの島が理想境のままではいられなかったことは当然であり、この点で「バーミューダ島」は一つの深い象徴詩ということが正しいであろう。

マーヴェルの「バーミューダ島」が美しくきよらかに描かれていなければならないほど読者はこの詩が書かれた時の厳しい英国の現実を思い浮べないわけにはいかない。マーヴェル自身はやがてミルトンのラテン語秘書助手としてクロムウェルを指導者とする共和国政府の仕事に従事しようとしている。この詩が書かれた時おそらくマーヴェルにはその決心ができていたことであろう。そのことを思うとこの詩の中に圧倒されるような力が隠されていることを改めてわれわれは感ずる。マーヴェルにもこの後の生涯や、祖国の運命についての不安があったであろう。しかしマーヴェルは真珠の福音を恵みとして与えた救い主、またすべてのものをよく創造した創り主⁽¹⁶⁾に全幅の信頼を置いて新しい公生涯に出でたととしていたと言えるのではないであろうか。多難な公生涯を目前にするマーヴェルに、この神に信頼を置く詩が与えられていたことは大きな幸いであったと思わざるをえないし、またこの詩を祖国の救いと回復を願うマーヴェル自身の祈りと考えることも可能であると思われる。

六

マーヴェルの詩はその作られた年代がはっきりしないものが多いが、すぐれた田園詩の多くのものは、一六五〇年から五三年ぐらいいまでに書かれたであろうと言われる。今までにとり上げてきた詩も必ずしもこれが年代順に作られたということはできないが、前述のようにこれをマーヴェルの心の成長をあらわす一過程と言うことは可能であろう。

ここに最後にとり上げたいと思う詩は「堅固なたましいと世俗の快樂の対話」(A Dialogue, between the Resolved Soul and Created Pleasure)である。この詩も書かれた年代ははっきりしないが、信仰者マーヴェルのひたむきな心が率直にあらわされている。この詩において「快樂」はいわば人格を持った誘惑者であり、次々に「たましい」に誘いをかける。新約聖書のイエスの荒野の誘惑の記事を想起させるし、それ以上にミルトン『復樂園』をわれわれに思い起させるものを持っている詩である。

最初「快樂」は、自然が与える饗宴の中で憩うことをすすめるが、「たましい」は、「私は天国で食事をするもの、途中でゆっくり寛げはしない。」(I sup above, and cannot stay / To bait so long upon the way. — 11. 17, 18)と簡単に答える。ついで「快樂」は柔いばらの花びらのような羽ぶとんで休むようにすすめるが「たましい」は、「なすべきことを思うことが一そう心のやすまる休息だ。」(My gentler rest is on a thought, / Conscious of doing what I ought. — 11. 23, 24)と答へる。さらに「快樂」がかぐわしい香りで身を蔽って神々の一人のようにしてあげよう、と言うのに対して、「たましい」は、「高ぶらないことを知っているたましいが天の、また自分自身の芳香だ。」(A Soul that knows not to presume / Is heaven's and its own perfume. — 11. 29, 30)と述べる。このようにして音楽、女性の美しさ、富、世の栄光等が次々に誘惑の材料となる。美しい女性を与えよう、という「快樂」に対し、「たましい」が与える言葉が印象深い。すなわち、「目に見えるものがこれほど天国的なものなら、今見えていないものはどんなに天国的なこ

とぞしやう。」(If things of sight such heavens be, / What heavens are those we cannot see ? — 11. 55, 56)
と「たましい」は答えるのである。最後に「快樂」が誘惑するのは知識であり、占星術の背景があると思われるが、知識をとおして天に昇れ、というのである。それに対して「たましい」は謙遜の階段をのぼってはじめて天にのぼれるのだと答える。

PLEASURE

Thou shalt know each hidden cause ;

And see the future time :

Try what depth the centre draws ;

And then to heaven climb.

SOUL

None thither mounts the degree

Of knowledge, but humility. — 11. 69 — 74

(—おまえにすべてのものの隠されている原理を知らせてやろう。また本来の時を見せてやろう。まず土地の中心がどんなに深い所まで入っているか調べてみて、それから天に上ったらいのだ。

—だれも知識の階段を踏みながら天国へは行けない。謙遜という階段を踏んでだけ行けるのだから。)

最終連は合唱隊がうたい、「たましい」が勝利を得たことを喜んで宣言することでこの詩は終わっている。ペイクニーも言うように、「謙遜」という語は最後に出るが、これはこの詩の最も説得力のある中心テーマであり、この詩の中でマーズエルは少しづつ「謙遜」までの道を歩み進めていたのである。⁽¹⁷⁾この詩には決然たるたましいの告白の言葉が多く記されて

いてマールヴェル全体の詩の中ではやや窮屈な印象を与える可能性があるが、しかしマールヴェルの詩を貫く最も基本的な思想と信仰を表わしていると言えよう。一言で言えば、マールヴェルにとり目指す目標の場所は天国であり、また詩人マールヴェルはその数多い詩を書きながら最後に謙遜を身につけることを願ったと言える。以前に「花冠」で見てきたように、詩を書くことの中にも虚栄心がつきまといやすいことをすでに知ったマールヴェルである。キリストに学び謙遜になることができなければ真の詩も生れないし、天国への道も歩むことができないことをマールヴェルは教えられざるをえなかった。「花冠」と比較すれば一そうよく理解できると思うが、これがマールヴェルの詩の到達点であり、また視点をかえて言えば真の出発点であった。このことを知らされて詩を書くことができたマールヴェルはやはり幸せな人であった。

「アプルトン・ハウスによせる」の中でもとりわけ印象深い部分は第四連から第十連までのこの屋敷のつましさをうたっている部分である。この詩はフェアファクスに献げられているので、フェアファクスに対する賞め言葉が入るのはやむをえないと思われるが、この詩で見るかぎりフェアファクスは謙遜な奥床しい人柄の人としてあらわされている。この屋敷を見て詩人は、かつての謙遜な時代を想起してうたう。

But all things are composèd here

Like Nature, orderly and near :

In which we the dimensions find

Of that more sober age and mind,

When larger-sized men did stoop

To enter at a narrow loop;

As practising, in doors so strait,

(しかしここではすべてが自然そのもののように秩序正しくつましく造られている。その中に私たちはあの今よりも一そう正気だった時代と精神の寸法を見つける。その時大柄な人は天国の門に何とか入れるようにと懸命に練習を積むように、狭い扉の入口から入ろうと身を屈めたのだった。)

この第四連のみからでも謙遜な心を大切なものと考え続けた詩人の思いが理解できるように感ずる。L・C・ナイツはその著書の中のマーヴェルについての文章の中で、「謙遜は経験に対して開かれた心や、人生の多様性に対して先入観に根ざす型を押しつけまいとする心と密接に結びついていると思う¹⁸⁾」と述べているが、味わうべき言葉であると思う。マーヴェルの詩はその人生同様多様性に富んでいる。マーヴェルは恋愛もし、ヒューマーを愛し、自然と庭園を大切なものと考え、しかも筋のおった信仰の持ち主であった。そしてその土台に砕けた謙遜な心があった。マーヴェルはピューリタンだったが、自分でその心を狭くすることなく、広い心をもって人々と接した人だったようである。時には両面性を持つ人として曖昧模糊とした人物という印象を持たれたこともあったにせよ、人生の大切な局面に直面した折には節度を保ってその出所進退を過つことのなかった人だったと言える。特に共和制政府に就職した後のことだが、たとえばクロムウェルの死の際にうたった詩や、王政回復後身の危険にさらされていたミルトンを守って、ミルトンが平穩な晩年を過せるように努力した事実や、また「ミルトン氏の『失樂園』によせる」(On Mr Milton's *Paradise Lost*) などからその一貫した主義主張を確認することができる。マーヴェルがその生涯をかけて追い求めたものは、今の時代に生きるわれわれにもまた貴重なものであるにちがいない。

- (1) A. Alvarez, "Marvell and the Poetry of Judgement," in *Marvell: Modern Judgements*, ed. Michael Welding (London: Macmillan, 1969), p. 182.
- (2) Joan Bennett, *Five Metaphysical Poets* (1964; Cambridge: Cambridge University Press, 1971), p. 133.
- (3) ノロギノルソノ略政の轉叙の | ノロギ' Pierre Legouis, *Andrew Marvell: Poet, Puritan, Patriot* (1965; second edition, London: Oxford University Press, 1968) 124頁。
- (4) "To His Noble Friend Mr Richard Lovelace"
- (5) Christopher Hill, *Puritanism and Revolution* (1958; London: Panther Books, 1969), p. 328.
- (6) E. S. Donno, ed, *Andrew Marvell: The Complete Poems* (1972; Harmondsworth: Penguin Books, 1985), p. 50. ノロギのローマンの詩の古田氏の轉叙の46頁。
- (7) Christopher Hill, *op. cit.*, p. 336.
- (8) E. W. Tayler, "Marvell's Garden of the Mind," in *Marvell: Modern Judgements*, ed. Michael Welding (London: Macmillan, 1969), p. 262.
- (9) *ibid.*, p. 267.
- (10) 『丑ハシムル日記』 166年 14頁 参照。
- (11) Joseph Pequigney, "Marvell's 'Soul' Poetry," in *Tercentenary Essays in Honor of Andrew Marvell*, ed. Kenneth Friedenreich (Hamden: Archon Books, 1977), pp. 98, 99.
- (12) *Andrew Marvell: The Complete Poems*, p. 255.

- (13) Bennett, *op. cit.* , p. 119.
- (14) *ibid.*
- (15) 『ヨハネの黙示録』二二章一、二節参照。
- (16) 『創世記』一章二一節参照。
- (17) Pequigney, *op. cit.* , p. 83.
- (18) L. C. Knights, *Public Voices* (London: Chatto & Windus, 1971), p. 93.